慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	苗村丈伯の著作について
Sub Title	
Author	石田, 礼以菜(Ishida, Reina)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.75- 89
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0075
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

苗村丈伯の著作について

石田　礼以菜

一、はじめに

苗村丈伯は、江戸時代前期の京都[1]の作家である。元禄五年（一六九二年）刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝記』を始めとして、辞書・浮世草子・注釈・節用集・年代記・暦・医学・往来物・武家故実・年中行事などの様々な分野の作品を著した。この人物は現在ではあまり知られていないが、代表作である『女重宝記』は、その続編ともいえる、元禄六年（一六九三年）刊の、男性の教養のための辞書である『男重宝記』序に、「書林某来りて嘆美して曰余が嚮に作れる女重宝記五冊は世の重宝として梓に鏤め摺写する事いとまなし希は是に対して男重宝記を作れと」とあるように、当時よく売れ、それ以降、多くの作家によって様々な重宝記が著される契機となった[2]。また、苗村丈伯の特徴として、井上和雄氏の「女重宝記」『浮世絵』第一六号（浮世絵社　一九一六年九月）に、「彼（筆者注：苗村丈伯）の著述中の挿画のある分は、皆悉く同一の筆意である」とあるように、彼の作品の挿絵は、全て同じ絵師によって描かれたものであることが挙げられる。具体的には、現在、苗村丈伯作であると考えられる作品のうち、挿絵がある作品は一六作品（挿絵がごく小型かつ少数であり絵師不明の三作品を除く）であるが、そのうち一作品に、江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛の署名があり[3]、一五作品が、私見では吉田半兵衛画である。このことから、苗村丈伯は、吉田半兵衛と関係の深い作家であると考えられるが、吉田半兵衛は、その他にも、江戸時代前期の作家である井原西鶴などの多くの作家と関わりがあるので、苗村丈伯についての研究は、江戸時代前期の出版界を知る上で意義のあることであるといえる。

苗村丈伯についての主な先行研究は、前半で、苗村丈伯に関する文献を紹介し、後半で、方言研究の観点から、『男重宝記』と、貞享五年（一六八八年）刊の、当時の正しい京都弁の使い方を記載した作者不明の語学書である『浮世鏡』との内容の共通点を指摘した、大田栄太郎氏の「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一九九号（明治書院　一九四〇年一一月）、同じく、元禄七年（一六九四年）刊の、武士の礼儀作法について記載した故実書である『武家重宝記』

などの、苗村丈伯作であると考えられる作品を複数紹介した、大田栄太郎氏の「重宝記類と苗村丈伯（道益）―武家重宝記の発見など―」『書物展望』第一一三号（書物展望社 一九四〇年一一月）、寛文七年（一六六七年）刊の、和漢の有名な問答を集めた仮名草子である『理屈物語』の作者は苗村丈伯であると考察した、市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―」『国文白百合』第六号（白百合女子大学国語国文学会 一九七五年三月）などであるが、現在、苗村丈伯についての最も新しい見解が示されているのは、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第四巻（岩波書店 一九八四年）「苗村丈伯」項（市古夏生氏解題）である。以下に、その部分を引用する。

苗村丈伯（なむらじょうはく） 仮名草子作者。字は三径、号は林庵・苗斎・艸田斎（子）・寸木子[4]・径山子など。丈伯は通称。生没年未詳。元禄七年（一六九四）に最後の著書が出版されているので、それ以後の没。【事蹟】丈伯の一族であるという宇津木昆台著『日本医譜』によれば、近江国彦根の人で、彦根藩井伊侯の侍医であったが、故あって致仕し、同国野洲郡落合村に隠栖したという。ただし彦根藩の記録による確認はできない。隠栖したというも、元禄年間は京都に住し、盛んに執筆を続けている。寛文七年（一六六七）に径山子の号で仮名草子『理屈物語』を述作刊行しているが、以後は文学性のない実用書・俗解書を専ら公けにしている。丈伯は言葉に関して特に興味を持っていて、諺やその語源について記した『籠耳』（貞享四年（一六八七）刊）や女房詞をも収めている『女重宝記』（元禄五年刊）、方言について一項を設けている『男重宝記』（元禄六年刊）があり、節用集類に『頭書大益節用集綱目』（元禄三年刊）、『世話用文章（世話字節用集）』（同五年刊）、『篆字和玉篇綱目』（同六年刊）などがある。一種の便利帳とでもいうべき重宝記類には前記二書の他に『武家重宝記』（元禄七年刊）と『年中重宝記』（同年刊）がある。古典の俗解書としては、『徒然草絵抄』（元禄四年刊）、『伊勢物語絵抄』（同六年刊）などがあるが、本文の行間に読みくせと簡単な注を挿み込み、頭書部分に挿絵と注釈を半々に施したもので、あまり注目すべき書ではない。その絵は丈伯自ら描いている。他に医学方面では『医学正伝或問』の注釈書『正伝或問増補頭書』（天和二年（一六八二）刊）と『万病回春』の俗解書『俗解龔方集』（元禄六年序刊）、漢詩の関係では『聚分韻略』改編本（延宝四年（一六七六）刊）と『錦繡段訓解』（元禄五年刊）、手形の文例集『万案紙手形鑑』（元禄六年刊）などがある。【付記】浮世草子『御伽人形』（宝永二年（一七〇五）刊）や『伊勢物語大成』（元禄十年刊）、『首書徒然草』（同十一年刊）を執筆している苗村松軒は、『伊勢物語』の両注釈書を比較した結果、本文の読点の打ち方や在原業平の伝記の記事に相違する点が少なからず認められるので、丈伯と別人と考える方が妥当であろう。

しかし、後述するように、苗村丈伯については、「苗村」という名字が比較的珍しいこともあり、現在、名字や号が同一ま

たは類似した複数の別人と混同されており、その経歴が正しく整理されていないという問題点がある。そこで、本稿では、苗村丈伯についての再検討を行い、その経歴と作品をより明らかにしてみたい。第二章では、苗村丈伯（三径）と径山子について、第三章では、苗村丈伯と苗村介洞について、第四章では、苗村丈伯と苗村松軒について比較し、それぞれの章で、苗村丈伯と同一人物であるかを検討する。

二、苗村丈伯（三径）と径山子

まず、苗村丈伯（号は三径）と、寛文七年（一六六七年）刊の、『理屈物語』を著した径山子は同一人物かという問題についてである。『理屈物語』は、序に「径山子序」とあり、元禄五年（一六九二年）刊『書籍目録』第四巻「仮名和書」項では、「六 理屈物語 苗村丈伯作」と記されていることから、当時から、『理屈物語』の作者である径山子は、苗村丈伯のことであると考えられていたことがわかる。これについて、大田栄太郎氏の「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一一九号には、「（『男重宝記』序の）三径と云ふ名も理屈物語の径山子と関係的のものではないかと考へる。」とあり、市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―」『国文白百合』第六号では、書目・作者像・書肆・筆跡等の検討により、苗村丈伯のことであるとしている。一方で、鈴木行三氏の『戯曲小説近世作家大観』第一巻（中文館書店 一九三三年）「艸田子」[5]項には、「諸書[6]に径山子と署名せる『理窟物語』を丈伯の作とせるは、元禄の『書籍目録』の作者附に拠りたるならんも『書籍目録』は必しも信ずべからず、径山子が丈伯の別号なるや否やも確証なし。」とあり、近世文学書誌研究会 近世文学資料類従 参考文献編9『世話用文章』（勉誠社 一九七六年）の小林祥次郎氏による解題には、「『径山子』は『三径』に似ているが、別人であると考えるべきであろう。」とある。ちなみに、その理由については明記されていない。

先に紹介した先行研究の中で、市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―」『国文白百合』第六号は、『理屈物語』の作者について、延宝二年（一六七四年）刊『書籍題林』第二巻「仮字和書」項では、「六 理屈物語 山本三径」とあるのに対して、『書籍目録』第四巻「仮名和書」項では、「六 理屈物語 苗村丈伯作」とあることから、山本泰順（号は三径）と苗村丈伯（号は三径）のいずれかであるという仮定に基づいて、苗村丈伯のことであると結論付けており、『理屈物語』の作者である径山子が、山本泰順と苗村丈伯のどちらでもない可能性については言及されていないという問題点がある。しかし、山本泰順と苗村丈伯のどちらでもない可能性についても検討するべきであると考えられるので、筆者が改めてこの問題について検討した結果、『理屈物語』の作者である径山子と苗村丈伯は、別人である可能性があることが分かった。その理由は以下の通りである。

まず、号についてである。三径と径山子は、「径」の一字しか共通しておらず、それぞれの意味も、日本国語大辞典 第二版 編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』第

二版 第四巻・第六巻（小学館 二〇〇一年）「三径」項には、「（漢の蔣詡が庭に三すじの小道を作り、松・菊・竹をそれぞれの小道に植えたという故事から）庭園内の三すじのこみち。転じて、隠者の門庭、または、住居。」とあり、「径山」項には、「中国五山の一つ。浙江省北部、杭州西方の臨安県にある天目山の東北峰。」、「山径」項には「山中のこみち。やまみち。」、「子」項には、「自分の名の下に添えて、謙遜の意を表わす。」とあるように、特に関連性はない。

次に、筆跡についてである。市古夏生氏の「『理屈物語』作者考―山本泰順と苗村丈伯―」『国文白百合』第六号では、「『理屈物語』の序文は、かなり特徴のある書体である。版下は当然、作者が書いたものであろう。私見では、この書体は詳細にみると、丈伯作『世話用文章』（元禄五年刊、佐野九兵衛板）序文の筆跡と幾分似かよっていることが認められる。」とある。苗村丈伯の作品の筆跡については別稿に譲るが、私見では、苗村丈伯の作品の筆跡と『理屈物語』の筆跡は異なっている。

次に、挿絵についてである。前述の通り、現在、苗村丈伯作であると考えられる二四作品のうち、挿絵がある一六作品は、いずれも吉田半兵衛画と考えられるが、『理屈物語』の挿絵は、私見では別人画である。[7]

次に、苗村丈伯と径山子の作品の内容についてである。現在確認されている、径山子という号の作者が著した作品は『理屈物語』のみであるが、『理屈物語』の本文と、苗村丈伯の作品の本文を詳細に比較した結果、明らかに一致する箇所などは確認できなかった。ただし、先に引用した、『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項でも指摘されているように、苗村丈伯は言葉に関して特に興味を持っていたが、『理屈物語』にも、和漢の有名な諺の語源についての話が載っているという共通点がある。しかし、これだけで『理屈物語』が苗村丈伯作であると断定することは難しい。

このことから、苗村丈伯と径山子は、別人である可能性があるといえる。

三、苗村丈伯と苗村介洞

次に、苗村丈伯と、延宝二年（一六七四年）～寛延元年（一七四八年）の近江国の医師である苗村介洞は同一人物かという問題についてである。『日本古典文学大辞典』第四巻では、苗村丈伯と苗村介洞は混同されておらず、鈴木行三氏の『戯曲小説近世作家大観』第一巻「艸田子」項でも、「『諸家著述目録』『大日本人名辞書』等には、常伯を苗村介洞と混同し、常伯の歿年を寛延元年とすれど、常伯と介洞とは親戚なるが如きも全く別人にして、寛延元年に歿したるは介洞にして丈伯にあらず。介洞径[8]は近江八幡の人にして、委しくは『近世畸人伝』巻之四に出でたり。」と指摘し、さらに、同じく、鈴木行三氏の「誤られたる重宝記の作者苗村丈伯」『書物展望』第一一五号（書物展望社 一九四一年一月）によって、苗村丈伯と苗村介洞が混同された経緯について、中根粛治氏の『慶長以来諸家著述目録』和学家之部（青山堂支店 一八九四年）「苗村常伯」項で、「苗村常伯 一作丈伯号介洞」とされたことが原因であると

考察されているが、中根粛治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部、[9]東京経済雑誌社『大日本人名辞書』（東京経済雑誌社 一九一七年）、[10]滋賀県教育会『近江人物志』（文泉堂 一九一七年）、滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八巻（蒲生郡 一九二二年）、[11]関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』（東洋図書刊行会 一九四一年）、[12]大田栄太郎「苗村丈伯の略伝 附 男重宝記と浮世鏡との比較」『国語と国文学』第一一九号、大田栄太郎「重宝記類と苗村丈伯（道益）―武家重宝記の発見など―」『書物展望』第一一三号などでは、苗村丈伯と苗村介洞が混同されている。これは、いずれも「苗村」という名字であることや、苗村丈伯は医学書を著しており、苗村介洞は医者であったことなどが原因であると考えられる。しかし、鈴木行三氏が『戯曲小説近世作家大観』第一巻および「誤られたる重宝記の作者苗村丈伯」『書物展望』第一一五号で指摘している通り、苗村丈伯と苗村介洞は、別人であると考えられる。ここに改めて理由を述べると、以下の通りである。

まず、当時の文献における記述についてである。苗村介洞についての最も古い記述である、天明八年（一七八八年）刊『近世畸人伝』第四巻「苗村介洞 附 妻女」[13]項には、苗村介洞が医師であり作家でもあったという記述はなく、文化一五年（一八一八年）写の、古今の儒学者についての伝記である『芸苑古今儒林伝』や、江戸時代後期頃写の、日本の医者についての伝記である『日本医譜』[14]では、苗村丈伯と苗村介洞は別項で説明されており、特に、『芸苑古今儒林伝』では、第二巻「苗村丈伯」項には、

苗村丈伯　京師人師不詳

節用集頭書　三　　女調法記　五
理屈物語　六　　庭訓往来首書　二
貞永式目首書　一　　正伝或問首書　三
俗解龔方集　八　　年代記絵抄　七
絶句熟字訓解　一

とあり、第三巻「苗村介洞」項には、

苗村介洞　苗村氏名道益号介洞近江八幡人世々医ヲ業トス弱冠ノ時伊藤仁斎東涯ノ二先生ニ学ブヨク文ヲ属ス比日ノ事務ヲモ漢文ヲ以テ筆記ス性豪爽ニシテ物ニ拘泥セス旁ラ和歌ヲ好メリ寛延元年戊辰十月二十三日卒ス年七十五六如和尚ハコノ道益ノ孫也

とあるように、苗村丈伯は京都の作家、苗村介洞は近江国の医師として説明されている。

次に、没年についてである。『近世畸人伝』第四巻「苗村介洞 附 妻女」項には、苗村介洞の没年と当時の年齢について、「寿七十有五、寛延元年戊辰歳、十月廿三日也、」と記されている。寛延元年（一七四八年）に七五歳であったということは、延宝二年（一六七四年）～寛延元年（一七四八年）に生きた人物であると考えられる。もし、苗村丈伯と苗村介洞が同一人物であった場合には、現在確認されている、苗村丈伯の署名がある作品の中で、最も刊行年が早い作品である『聚分韻略』が刊行された延宝四年（一六七六年）には三歳であったということになるので、適切な年齢ではない。

このことから、苗村丈伯と苗村介洞は、別人であると考えら

れる。

四、苗村丈伯と苗村松軒

次に、苗村丈伯と、江戸時代前期の京都[15]の作家であり、元禄一〇年（一六九七年）刊の、『伊勢物語』などの注釈書である『伊勢物語大成』、元禄一一年（一六九八年）刊の、『徒然草』の注釈書である『つれつれ草』、宝永二年（一七〇五年）刊の、怪談を集めた浮世草子である『御伽人形』の三作品を著した苗村松軒は同一人物かという問題についてである。

『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項では、先に引用したように、苗村丈伯と苗村松軒は別人であるとされているが、この二人は、同一人物であると考えられる。その理由は以下の通りである。

まず、作品名についてである。苗村丈伯の作品には、元禄五年（一六九二年）刊『女重宝記』の改題本である、宝永八年（一七一一年）刊『女重宝記大成』や、元禄六年（一六九三年）刊『男重宝記』の改題本である、江戸時代前期頃刊『男重宝記大成』がある。一方、苗村松軒の作品にも『伊勢物語大成』があり、作品名の付け方が類似している。

次に、署名についてである。『女重宝記』は、序に「艸田寸木子叙」という署名があることから苗村丈伯作とされているが、その改題本である『女重宝記大成』には、序の署名が「奈林軒」という、「松軒」に類似した号に変更されている伝本[16]が存在する。

次に、筆跡についてである。西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベースの、江戸時代前期頃刊『廻国一夜宿』（『御伽人形』（苗村松軒作）の改題本）項によると、「版下筆蹟は苗村丈伯（艸田斎寸木子）本に類似する」とある。

次に、挿絵についてである。前述の通り、苗村丈伯の特徴として、彼の作品の挿絵は、全て吉田半兵衛画であると考えられることが挙げられるが、苗村松軒の作品の挿絵についても、いずれも吉田半兵衛画であると考えられる。具体的には、『伊勢物語大成』は、貞享二年（一六八五年）刊の、『伊勢物語』の読み方を示した挿絵入りの注釈書である『伊勢物語絵入読曲』[17]（刊記に「絵師 京 吉田定吉」という署名がある）と、元禄六年（一六九三年）刊の、『百人一首』の挿絵入りの注釈書である『百人一首絵抄』（刊記に「京極四条 吉田半兵衛」という署名がある）の挿絵が全て収録されていることから吉田半兵衛画であるといえ、『つれつれ草』『御伽人形』は、私見では吉田半兵衛画である。

次に、苗村丈伯と苗村松軒の作品の構成についてである。苗村丈伯の作品には注釈書が多く、現在、苗村丈伯作と考えられる二四作品中一四作品が、本文を二段に分け、上段に注釈、下段に本文などを載せたものであるという特徴があるが、苗村松軒の作品である、『伊勢物語大成』は、本文を二段に分け、上段に『百人一首』の本文・挿絵・注釈を載せ、下段に『伊勢物語』などの本文・挿絵を載せた注釈書であり、『つれつれ草』（外題は「頭書絵抄つれ〳〵草」）は、本文を二段に分け、上段に『徒然草』の注釈を載せ、下段に本文・挿絵を載せた注釈書であるという点が共通している。

次に、苗村丈伯と苗村松軒の作品の内容についてである。『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項には、先に引用したように、「浮世草子『御伽人形』（宝永二年（一七〇五）刊）や『伊勢物語大成』（元禄十年刊）、『首書徒然草』（同十一年刊）を執筆している苗村松軒は、『伊勢物語』の両注釈書を比較した結果、本文の読点の打ち方や在原業平の伝記の記事に相違する点が少なからず認められるので、丈伯と別人と考える方が妥当であろう。」とある。この「『伊勢物語』の両注釈書」というのは、元禄六年（一六九三年）刊の『伊勢物語絵抄』（苗村丈伯編）と、『伊勢物語大成』（苗村松軒編）のことであると考えられる。そこで、『伊勢物語絵抄』と『伊勢物語大成』の本文の比較を行ったところ、『伊勢物語』の本文の句点の打ち方については、市古夏生氏が指摘した通りに異なっていた。例えば、『伊勢物語絵抄』における、『伊勢物語』第一段の部分（第一巻三丁オ・ウ）は、

むかし。男うゐかうふりしてならの京
かすがの里にしるよしゝて。かりにい
にけり。その里にいとなまめいたる女。はら
からすみけり。此男かいまみてげり。おも
ほへず。ふる里にいとはしたなくて有ければ
心ちまどひにけり。男のきたりけるかり
ぎぬのすそをきりて。歌をかきてやる。其
男しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける
　かすが野のわかむらさきのすり衣
　しのぶのみだれかぎりしられず

となん。おいつきていひやりける。つゐでおもしろきことゝもやおもひけん
　みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに
　みだれそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は。かくいちはやきみやびをなんしける

という句点の打ち方であるのに対し、『伊勢物語大成』における、『伊勢物語』第一段の部分（第一巻二丁オ・ウ）は、

むかし。男。うゐかうふりして。ならの京。かすがの里に。しるよしゝてかりにいにけり。其さとにいとなまめいたる。女はらから。すみけり。此男。かいまみてけり。おもほえずふるさとにいとはしたなくて有ければ。こゝちまどひにけり。男の。きたりける。かり衣のすそをきりて。歌をかきてやる。其男。しのぶずりの。かりぎぬをなん。きたりける
　かすがのゝ。わかむらさきのすりころも。
　しのぶのみだれかぎりしられず

となん。をいつきて。いひやりけるついでおもしろきことゞもや。おもひけん
　みちのくの。しのぶもぢずりたれゆへに。
　みだれそめにしわれならなくに

といふ。歌の心ばへなり。むかし人はかくいちはやきみやびをなんしける

という句点の打ち方であった。しかし、『伊勢物語』の本文以外の部分（『伊勢物語絵抄』「伊勢物語作者之説」（第一巻一丁

オ）・在原業平と伊勢の伝記（第一巻二丁ウ）と、『伊勢物語大成』序（第一巻一丁オ）・「伊勢御伝記」（第二巻裏表紙見返し）・「在原なりひら伝記」（第三巻表紙見返し）については、本文の内容が一致または類似していた。例えば、『伊勢物語絵抄』の「伊勢物語作者之説」（第一巻一丁オ）には、

いせ物語は伊勢の御の筆作せるゆへにいせ物かたりと云といへどもなを説々有
て決し難しと定家卿の奥書にもみえたり其ゆへは此物語に謙退比興の詞と
て歌はよまざりけれど元より歌の事はしらざりければさる歌のきたなげさよなど
いへる事ありこれみな卑下の詞にてみづからの書作といふ事しられたり又心中の
秘密とて二条后に来りかよひ斎宮にあひたりし事などをしるせりこれらの事
他人の推してしるしがたき事なれば業平の自記なるべし其うへ朱雀院の
ぬりごめになり平自筆のいせ物かたりあるといふ説もあるをやしかれども
此物かたりの中に仁和の帝の芹河の行幸の事ありこれ業平かくれ給ひ
てのちの事兄の行平の歌をかけりかつ又此ものかたり業平の歌のみにあら
ず万葉集の歌など書まじへたる所々あまたなり其外にも古歌をかきて
作りものかたりとみゆる所もあれば又なりひらの自記のみにはあるべからす
されば古人の御説にもまづ業平自記の双紙ありしうへに伊勢さ
ま〳〵の事を書そへて作り物語となして宇多院の皇宮七条のきさき
温子のかたへ奉りしといふに決せり

と記されており、在原業平と伊勢の伝記（第一巻二丁ウ）には、

○業平は平城天皇の御孫阿保親王の五男なり母君は伊登内親王と申桓武
天皇の御むすめ也淳和天皇の天長二年八月七日に生れ給ひて同三年に阿保親王
表をとりて在原朝臣の姓を給ふ陽成院の元慶元年に右近衛権中将に任ず在
原にて五男なるゆへ在五中将といへり又閑麗翁ともいへり
仁明天皇承和七年三月
十一日に十六歳にて元服せり家は三条法門のみなみ高倉の西に有その家づくりち
まき柱といふ物のよし鴨長明が無名抄にみえたり元慶四年五月廿八日に五十六歳にて
卒すと三代実録に有菩提所は大和の国石上の在原寺なり本朝神仙伝にはなりひら
一旦よし野の河上にのぼりて行がたなきよししるせり賀茂の岩本の宮になり平

をいはひて月をめで花をながめし古のやさしき人はこゝに
在原と慈鎮の歌有
○伊勢は右大臣内麿の末孫前大和守従五位上藤原継蔭のむ
すめ日野の元祖真
夏の玄孫にて七条后温子に宮つかへの女房也宇多帝の寵愛
を得て行明親王
をうめりよつて伊勢の御息所ともいふ也伊勢の御といふも
女御といふ事也家は二条
東洞院に有墓は津の国能因が旧跡の古曽部といふ所のうへ
に伊勢寺とて有

と記されている。一方、『伊勢物語大成』序（第一巻一丁オ）には、

▲此物がたりは伊勢の御の筆作せるゆへに題号をもかくい
へりといへど猶其こんげん決し
がたきよし定家卿の御おくがきにみゆ又なりひら自作かと
みればすでに死後の事ものせら
れたりひつきやう其作者をいろ〳〵とせんさくにをよばず
たゞ其ことばつぎのをもしろき所をたふとみぶんほうの手
本ともせよかしと定家卿の御説はしゆしやうの事なるべし
（以下略）

と記されており、「伊勢御伝記」（第二巻裏表紙見返し）には、

伊勢は右大臣内麿の末孫
前大和守従五位藤原継蔭
のむすめ日野の元祖真夏
の玄孫にて七条后温子に
宮つかへの女房也宇多の帝
のてうあひを得て行明親王
をうめりよつて伊勢の御息
所といふ也伊勢の御といふも
女御といふ事也家は二条東
洞院に有墓は津のくに
能因法師が旧跡の古曽部
といふ所のうへに伊勢寺
とて有

と記されており、「在原なりひら伝記」（第三巻表紙見返し）には、

▲業平は平城天皇の御まご
にて阿呆親王の五男也仁王
五十三代淳和天皇天長二年
四月一日ならの京にて生れり
元服は五十四代仁明天皇承和
七年三月十一日年十六才也

と記されている。傍線部が一致している箇所であるが、特に、伊勢の伝記については、ほぼ完全に一致していた。

また、元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』（苗村丈伯作）と、『つれつれ草』（苗村松軒作）の本文を比較したところ、『徒然草』序段の本文の句点の打ち方については異なっていたが、兼好の伝記については、『徒然草絵抄』の序（第一巻一丁オ）では、「観応元年四月八日に歳六十八にて終焉せられぬ存命の時より山背国双の岡といふ所にかねて墓をもうけかた

はらに桜をうへ辞世の歌をよみをかれたりちぎりおく花とならびの岡のべにあわれいく世の春を過さんと家集にみたり位牌は高野山西光院又坂本の西教寺に有」と記されており、『つれつれ草』の序（第一巻一丁オ・ウ）では、「観応元年四月八日に六十八歳にして為果しれたりといへり今におゐて高野山西光院に位牌有墓はならびの岡に有べし家集にならびのをかに無常所をまふけてかたはらに桜をうへさけてちぎりをく花とならびの岡のべにあわれいく世の春を過さんとよめり」と記されているなど、本文の内容に類似点があった。

このことから、苗村丈伯と苗村松軒は、同一人物であると考えられ、【表一】に記載したように、苗村丈伯の最後の作品（『武家重宝記』）は元禄七年（一六九四年）刊であり、苗村松軒の最初の作品（『伊勢物語大成』）は元禄一〇年（一六九七年）刊であることから、苗村丈伯は、元禄一〇年（一六九七年）以降は、松軒という号を用いていたと考えられる。

最後に、苗村丈伯は作家であり絵師でもあったかという問題について考察してみたい。『日本古典文学大辞典』第四巻「苗村丈伯」項では、元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三径 図讃」、元禄六年（一六九三年）刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子 三径図讃」とあることから、「その絵は丈伯自ら描いている。」としている。しかし、【表一】に記載した、現在、苗村丈伯作であると考えられる他の作品には、挿絵に苗村丈伯画であるという署名があるものはなく、『徒然草絵抄』と『伊勢物語絵抄』は、私見では吉田半兵衛画である。また、「図讃」という語については、『日本国語大辞典』第二版 第三巻（小学館 二〇〇一年）に、「図讃」と類似した「画讃」という語について、「画の余白に、内容を補うように書き添える文章、詩歌。讃。」と説明されており、絵を描く人物とその画賛を書く人物が同一人物であるという意味を表すものではないといえる。よって、苗村丈伯はあくまで作家であり、作家であり絵師でもあったとする先行研究は誤りであると指摘したい。

五、おわりに

本稿では、まず、苗村丈伯（号は三径）は、先行研究において、「苗村」という名字が比較的珍しいこともあり、名字や号が同一または類似した複数の別人と混同されており、現在、径山子・苗村介洞・苗村松軒と同一人物あるいは別人と考えられていることを確認した。そして、苗村丈伯は、径山子・苗村介洞とは別人であり、苗村松軒とは同一人物であるという可能性を指摘した。以上の検討により、苗村丈伯の概要を改めて整理すると以下の通りである。苗村丈伯は、江戸時代前期の京都の作家。号は三径・松軒など。元禄五年（一六九二年）刊の、女性の教養のための辞書である『女重宝記』を始めとして、辞書・浮世草子・注釈・節用集・年代記・暦・医学・往来物・武家故実・年中行事などの様々な分野において、【表一】に記載したような二四作品を著した。

また、苗村丈伯については、元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三径 図讃」、元禄六年（一六九三年）刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士

【表一】 苗村丈伯の作品一覧表

刊行年	刊行月	作品名	分類	署名	絵師	書肆
延宝四年（一六七六年）	一二月	『聚分韻略』	辞書	跋「林菴 苗村丈伯 識」「三径」「林印苗斎」	挿絵なし	書肆 八尾勘兵衛彫刻
貞享四年（一六八七年）	六月	『籠耳』	浮世草子	序「艸田斎書」	〔吉田半兵衛〕画	書林 田中庄兵衛・万屋庄兵衛 同梓
貞享五年（一六八八年）	三月	『庭訓往来図讃』	注釈	署名なし（『書籍目録』によると苗村丈伯作）	〔吉田半兵衛〕画	書林 山崎屋市兵衛・丸屋半兵衛 同梓
	五月	『庭訓往来絵抄』	注釈	署名なし（『書籍目録』によると苗村丈伯作）	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸日本橋南一丁目 利倉屋喜兵衛
元禄三年（一六九〇年）	四月	『頭書大益節用集綱目』	節用集	跋「苗村丈伯跋」	絵師不明	書堂 津田氏宗智・山本五兵衛 同梓
元禄四年（一六九一年）	一月	『徒然草絵抄』	注釈	刊記「洛陽処士 艸田斎寸木子三径 図讃」	〔吉田半兵衛〕画	書林 万屋庄兵衛・大文字屋七郎兵衛 同梓
元禄五年（一六九二年）	四月	『年代記大絵抄』	年代記	署名なし（『芸苑古今儒林伝』によると苗村丈伯作）	第一巻～第三巻は別人画、第四巻～第六巻は〔吉田半兵衛〕画	江戸日本橋青物町 伏見屋兵左衛門・大坂梶木町 伊丹屋太良右衛門・京御幸町 伊賀屋久兵衛・京寺町 吉野屋次郎兵衛 合梓
	五月	『女重宝記』	辞書	序「艸田寸木子叙」	〔吉田半兵衛〕画	書林 江戸青物町 万屋清兵衛・大坂梶木町 伊丹屋太郎右衛門・京寺町 吉野屋次郎兵衛 板行
	七月	『世話用文章』	節用集	序「艸田子 識」	〔吉田半兵衛〕画	書林 貞節軒 烏丸通七観音町 佐野九兵衛 梓
	九月	『古暦便覧備考』	暦	序「苗村丈伯三径 識」「林印苗斎」	絵師不明	書林 大坂 伊丹屋太郎右衛門・京 吉野家次郎兵衛・大和屋勘七郎 梓
	一二月	『錦繡段訓解 仮名付』	注釈	刊記「苗村 丈伯 三径考」	挿絵なし	五条橋通万寿寺町舛屋 川勝五郎右衛門
	一月	『伊勢物語絵抄』	注釈	刊記「洛陽処士 艸田子三径 図讃」	〔吉田半兵衛〕画	江戸芝神明前 井筒屋忠左衛門・大坂真斎橋筋 秋田屋市兵衛・京押小路橘町 大文字屋七郎兵衛

元禄六年（一六九三年）	二月	『俗解龔方集』	医学	序「苗村丈伯三径　序」「三径」「林印苗斎」	絵師不明	刊記なし	江戸青物町　万屋清兵衛・大坂心斎橋筋　本屋平兵衛・京寺町松原　菊屋七郎兵衛
	三月	『百人一首絵抄』	注釈	署名なし	吉田半兵衛画		
	五月	『小篆増字和玉篇綱目』	辞書	序「苗村丈伯　識」	挿絵なし	書林　丸屋彦三郎刊	
	五月	『万案紙手形鑑』	往来物	序「艸田子」	挿絵なし	京極五条橋詰町　田中庄兵衛梓	
	六月	『男重宝記』	辞書	序「艸田子三径　題」	〔吉田半兵衛〕画	三条坊門通御所八幡之町　中川彦三郎・四条通東洞院東エ入町　大和屋勘七良　同梓	
	七月	『御成敗式目絵抄』	注釈	署名なし（『近代著述目録』などによると苗村丈伯作）	〔吉田半兵衛〕画	書肆　万屋庄兵衛板行	
元禄七年（一六九四年）	一月	『年中重宝記』	年中行事	序「洛下　艸田子　書」	〔吉田半兵衛〕画	刊記なし	京烏丸通六角下ル七観音町　佐野九兵衛・大坂真斎橋筋上入町　雁金屋庄兵衛　板
	一月	『武家重宝記』	武家故実	序「洛下　艸田子　識」	〔吉田半兵衛〕画		洛陽書堂　吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛
元禄一〇年（一六九七年）	五月	『伊勢物語大成』	注釈	序「苗村杏軒」	〔吉田半兵衛〕画		
元禄一一年（一六九八年）	六月	『つれつれ草』	注釈	序「苗村杏軒」	〔吉田半兵衛〕画		万屋庄兵衛　板
宝永二年（一七〇五年）	三月	『御伽人形』	浮世草子	序「苗村氏松軒子。或時予か茅店を叩て序をせよと匂て書を投込ぬ。是を披てみるに。杏軒子が茶呑がてら。耳に聞目に見し怪談を記録し。御伽人形と題号す。」	〔吉田半兵衛〕画		江戸日本橋南壱町目　桝屋五郎右衛門・京五条高倉西へ入町　林孫兵衛
〔元禄五年（一六九二年）以前〕	不明	『正伝或問増補頭書』	医学	伝本なし（元禄五年（一六九二年）刊『書籍目録』によると苗村丈伯作）			金や半右・せにや義

艸田子 三径 図讃」とあり、「処士」という語は、『日本国語大辞典』第二版 第七巻（小学館 二〇〇一年）では、「民間にあって仕官しない人。在野の人。浪士。浪人。処子。」と説明されているので、生活のために文筆活動をしていた浪人であったと考えられる。江戸時代前期において、何らかの事情があって浪人になったが、その教養によって数多くの書物を著し、民衆の啓蒙に貢献した作家としては、他にも、仮名草子作家の浅井了意や、好色本作家の坂内直頼などが存在する。[18] このことから、苗村丈伯も、当時における作家のあり方の一例として捉えることができるだろう。

今後も江戸時代前期の作家について、より具体的に明らかにしていきたい。

注

（1） 元禄四年（一六九一年）刊『徒然草絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田斎寸木子三径 図讃」、元禄六年（一六九三年）刊『伊勢物語絵抄』の刊記に「洛陽処士 艸田子 三径 図讃」、元禄七年（一六九四年）刊『武家重宝記』の序に「洛下 艸田子 識」、元禄七年（一六九四年）刊『年中重宝記』の序に「洛下 艸田子 書」とあることから、苗村丈伯は、京都の作家であったと考えられる。

（2） 元禄一五年（一七〇二年）刊の、当時の文化について批評した浮世草子である『元禄大平記』第一巻第二話「京と大坂に本替の沙汰」に、「当世はたゞかたひ書物をとり置て。あきなひの勝手には。好色本か重宝記の類が増じゃといへば」とあり、当時、重宝記がよく売れていたことがわかる。

（3） 現在確認されている、吉田半兵衛の署名がある作品は八作品である。詳しくは、拙稿「絵師 吉田半兵衛の周辺」『藝文研究』第一一五号（慶應義塾大学藝文学会二〇一八年一二月）を参照。

（4） 井上和雄「元禄版『女重宝記』」『書物展望』第五九号（書物展望社 一九三六年五月 四五八頁）には、苗村丈伯の号について、「艸田寸木は、他に類例もある通り、二字を四字に分割したものである。即ち、艸田は苗、寸木は村であつて、苗村といふ姓の人が匿名に使つたものである。」と説明されている。

（5） 苗村丈伯の号。

（6） 寛文七年（一六六七年）刊『理屈物語』を苗村丈伯作であるとしている書籍は、江戸時代以前では、文化八年（一八一一年）刊『近代著述目録』、文化一五年（一八一八年）写『芸苑古今儒林伝』、江戸時代後期頃写『日本医譜』があり、明治時代以降では、中根粛治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部（青山堂支店 一八九三年）、東京経済雑誌社『大日本人名辞書』（東京経済雑誌社 一九一七年）、滋賀県教育会『近江人物志』（文泉堂 一九一七年）、滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八巻（蒲生郡 一九二二年）、関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』（東洋図書刊行会 一九四一年）などである。

（7） 水谷不倒『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）によると吉田半兵衛画である。

（8） 「径」は誤植か。

（9） 中根粛治『慶長以来諸家著述目録』和学家之部（一六五頁）「苗村常伯」項

苗村常伯
一作丈伯号介洞
庭訓往来頭書三　貞永式目頭書一
理窟物語六　女重宝記五
正伝或問増補頭書二　俗解龔方集八
錦繡段熟字訓解一

（10） 東京経済雑誌社『大日本人名辞書』（一二六一頁）「苗村常伯」項
一に丈伯と云ふ近江八幡の医なり通称は道益名は常伯三友又介洞と号す世々医を業とす儒を伊藤仁斎に学ぶ寛延元年十月廿三日歿す年七十五、家訓往来頭書、貞永式目頭書、理窟物語、女重宝記

等の著あり（諸家著述目録、皇国名医伝（筆者注：正しくは『日本医譜』か））

（11）滋賀県蒲生郡『近江蒲生郡志』第八巻（八五五・八五六頁）「苗村道益」項（滋賀県教育会『近江人物志』（四四九・四五〇頁）「苗村介洞」項は、ほぼ同内容だが出典を『近世畸人伝』『大日本人名辞書』とする）

苗村道益は八幡町の人なり諱は常伯（太伯作）三友又介洞と号す家世々医を業とす、道益若くして伊藤仁斎の門に入り学を修す平常其日記は漢文にて書せり、性豪邁にして無我なり一日近里の病者を往診す、農夫水田に挿苗す道益言を交へずして過ぐ農夫之を罵る帰路農夫を呼で曰く先に我を罵りしが汝が田を植ゆるも業なれば予が往診も亦業なり、予が汝を慰めば汝も予を慰むべきなり如何と農夫謝して去る、一日重態の病者を往診して帰らんとす病家の人薬を請ひしかば道益曰く門を出て、数百歩の客に饗を設くるが如し事既に遅しと与へずして去る、寛延元年十月二十二日（筆者注：「二十三日」の誤植か）歿す年七十五、著す所、家訓往来頭書、貞永式目頭書、理屈物語、女重宝記等あり、室駒井氏辺幅を修めずして真率なること道益に過ぐ、老後薙髪して貞信といへど世人妙雷と呼ぶ、これ其声四隣を圧し心の思ふまゝなればなり、性文雅を好み歌を能くす歿年詳ならず歳八十六辞世の歌に、

あま小舟八十の湊を漕き過きて彼の岸近くなるそ嬉しき。

（12）関儀一郎・関義直『近世漢学者著述目録大成』（三五二頁）「苗村介洞」項

名は常伯、一に丈伯、字は三友、道益と称し、介洞は其号なり。近江の人。医を業とす。兼て伊藤仁斎に師事し、経術の造詣深し。寛延元年十月朔日没す、年七十二（筆者注：七十五の誤植）。（近江人物志）

著　述

家訓往来頭書　　貞永式目頭書

理窟物語　　女重宝記

（13）天明八年（一七八八年）刊『近世畸人伝』第四巻「苗村介洞　附妻女」項

○介洞は苗村氏、通名道益、世々医を業として近江八幡に住す、若き時は堀川伊藤氏に学ひて文学あり、日々の事務をも漢文に筆記す、性豪にして物にものとせられず、しかも無我なれは人憎ず、其一二をいはゞ、近村へ医療に行路程、農人の早苗を運び植るにあふ、世のならはしに、苗うゝるときは、行人労を慰して過るを、此老翁さもせねば、農夫等つふやきて、彼れ八幡の道益礼なしと誚る、老人これを聞ながら行過て、帰るさに又こゝを経る時、田にある人をこまねこす、さすがにしる人なれは、田を出て来るに、曰、さきにわれをそしれり、子よくおもふへし、子か苗うゝるも業也、吾医療に通ふも業也、われもし子を慰労せは、子もまた吾をしかすべし、いかにと、農人得答へず頭を掻て退く、又或家の請に応して、病人を診て速に去んとす、あるじ薬をこひしかは、曰、既に門を出て数百歩行たる客のために、饗をまうくるが如し、不可及と、終に出去る、これらにて、常の趣知べし、其口号も気象を見るへきものなれはこゝに挙、

悪蚤

捕渠計尽復防難、開戸偶然見月残、王猛手空憎爾点、幾回誤把腐綿丸、

病中作

花欲辞枝看色移、丹炉還少有誰知、漢君衰晩豈無感、起感秋風蘭菊時、

此作ありて後、いくほとなく卒す、寿七十有五、寛延元年戊辰歳、十月廿三日也、

介洞先に妻有りて蚤く亡す、後妻其真率辺幅ををさめさること主翁に過たり、老後薙髪して貞信といへりしかど、ある名はいはで、妙雷と人よびしは、其声四隣にひゞき、心におもふまゝのことをうち出す人なれば也、あるひはつれ〳〵なる所へ人到れは、よろこびて茶酒をもてなし、昔今のことをかきくつしかたり出て、なきみわらひみ興に入、客座久して対するに物うくなれば、われ酔てねふたし、今ははや帰られ

よ、いざ〳〵と催さるゝ類ひ、常にゆきゝする人は馴て心にもかけさるのみ歟、戯に逆ひて長居するも有し、是もわかきより文雅を好み師にもよらて歌をよまれしが、中には俊発のものもありき、今其二三を挙、

題しらす

同し枝をいかに時雨のふりわけて青葉か中に紅葉しぬらん

八十四といふ春、かけまくもかしこき御方より、高き齢をいはひ給ひて、連歌の一句を、親しく御筆を染て賜りける、百千とせ行末長き春日哉、此時によめりしうた

かしこしなかたのゝ草の露をしももらさて月の影やとすとは

享年八十六にして、身まかりなんとせしとき

あま小ふね八十の湊を漕過て彼岸近くなるそうれしき

おのれもかしこにありける日、長居せしまろうどの数なれは、こゝに追慕の筆をそむ、

(14) 江戸時代後期頃写『日本医譜』第三編第二五巻「苗村介洞」項・「苗村常伯」項

苗村介洞

名道益号介洞世業医住江州八幡又学堀川伊藤氏筆記雑事必以漢文性豪強不拘物然無我故人不憎之嘗往療近村農夫植苗風俗行人植苗時必慰労之此翁不然農夫謂曰八幡道益不知礼翁聞之帰途招農夫曰子向謂我其思之子之植苗業也余之医人亦業也余若労子則子亦応労余農夫黙而去又到或家診病者速去其家請薬曰譬如為出門数百歩之客設饔不可及也終出去其真率可祭

苗村常伯 一丈伯

一名丈伯又称文安江州彦根人仕井伊侯為侍医有故致仕隠同州野洲郡落合村博覧洽聞無所不窺所著有正伝或問増補頭書俗解龔方集八巻錦繡段熟字訓解貞永式目頭書絵入（庭訓往）□来絵入同首書節用集頭書女重宝記理窟物語元禄中人乃益夫戚族也

(15) 元禄一〇年（一六九七年）刊『伊勢物語大成』の刊記に「洛陽書堂 吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛」、元禄一一年（一六九八年）刊『つれつれ草』の刊記に「万屋庄兵衛板」、宝永二年（一七〇五年）刊『御伽人形』の刊記に「江戸日本橋南壱町目 桝屋五郎右衛門・京五条高倉西へ入町 林孫兵衛」とあるので、苗村松軒は、京都の書肆の近くに住んでいた、京都の作家であったと考えられる。

(16) 国立国会図書館蔵。

(17) 貞享二年（一六八五年）刊『伊勢物語絵入読曲』は、この作品自体には署名がないが、初版本である延宝二年（一六七四年）刊『伊勢物語抄』の扉に「伊勢物語首書抄は坂内氏山雲子初心のために作せる所なり」とあることから、坂内直頼（号は山雲子）作であると考えられる。

(18) 浅井了意については、北条秀雄 笠間選書11『新修浅井了意』（笠間書院 一九七四年）、坂内直頼については、塩村耕「俗学者 山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告』第二一号（人間文化研究機構国文学研究資料館学術資料事業部 二〇〇〇年九月）を参照。

（いしだ・れいな）